

◆ 青色防犯パトロール隊 活動レポート

地域の安心は、地域のつながりから

「いってきまーす！」

元気な掛け声とともに、地域の安全を見守る青色防犯パトロール隊（通称：青パト隊）が、6月中旬、パトロールに出発しました。専用のパトロールカー（通称：青パトカー）で、青色回転灯をつけ、拡声器で注意喚起の音声を流しながら、街区をゆっくりと巡回。事件や事故を未然に防ぎ、地域住民が安心して暮らせる環境づくりに取り組んでいます。

今回はそのパトロールの様子と、巡回後に行われた会議の内容をご紹介します。活動の舞台裏や地域の変化、そしてこれからの防犯について、ぜひ知っていただければと思います。



左から順に、原清一さん、鈴木正行さん、山田正行さん、出塚哲也さん、吉川照夫さん、村本雅輝さん

まちを走る青パトカー ゆっくり丁寧に、地域を見守る目

この日、巡回に出発したのは、ベテランの村本さん、原さん。広報部から畑中と島が後部座席に体験乗車しました。広報部の二人は青パトカーの乗車は初めて。「ちょっと緊張するね」と話しながらも、笑顔でスタートしました。

時速10-15kmのスピードで、車窓から町の様子をじっくり観察。

「ここは昔、畑だったのに、今はすっかり住宅街ですね」

「車を2～3台所有する家庭が増えて、駐車場不足も出てきてるようですよ」

といった暮らしの変化が自然と会話にのびります。こうした気づきが、地域課題の早期発見にもつながっています。

犯罪リスクのあるエリアを重点的に

巡回の途中、公園周辺が特に犯罪リスクが高いエリアであるとの指摘がありました。過去には子どもが刃物を突きつけられる事件もあり、「不審者が紛れ込みやすい場所」として警戒が必要なエリアです。

「公園は誰がいても不自然じゃないから、見守りが必要なんです」という村本さんの言葉には、経験に裏打ちされた防犯意識の高さを感じられました。こうした場所では、昼夜を問わず継続的な見守りが重要とされており、パトロール活動の意義が改めて確認されました。

地域の“今”を知ることパトロールの役割

防犯だけでなく、地域の商店や施設の情報も話題になります。

「ケーキ屋さんのシュークリームが人気ですよ」

「バスの本数が減って、高齢者の移動が不便になってきているようです」

こうした会話も、地域の暮らしを理解し合う大切なきっかけ。パトロールは地域を知る“学びの時間”でもあります。雑談が飛び交う和やかな雰囲気の中、集会所に戻り、青パト隊員全員集まっていただき、今までの活動の振り返りや今後の課題について会議が行われました。

青パト隊の設立背景と成果

青パト隊が発足したのは、平成15年（2003年）。外国人犯罪や空き巣が多発していた時代、国の施策により地域住民の協力体制が求められ、当自治会でも青パト隊が結成されました。最初は自家用車で村本さんら3人で青色ランプを点灯して昼間と夜間に実施していました。その翌年に吉川さんが自治会長の時に積極的に防犯活動が展開され、千葉市の防犯対策との連携で住民の防犯意識が高まっていきました。今では専用車両と明確な活動体制が整っています。

平成21年（2009年）の記録では、おゆみ野地区で侵入窃盗被害が年間1112件、あすみが丘は168件。そうした状況をふまえ、継続的な見回り活動で防犯力を高めてきた成果として、今では「この辺は安全だ」と住民が実感できるほどの改善が見られるようになりました。隊員数は多いときで9名いた時期もありましたが、今は6名です。

現在の課題は“見えにくい犯罪”

最近の犯罪傾向として、特殊詐欺が深刻化しています。

「総務省からお金が戻ると言われた」

「キャッシュカードを預かると電話があった」

といった事例もあり、高齢者を狙った手口が増えています。国や役所を名乗る電話には注意が必要です。青パト隊では、こうした情報を住民間で共有し、日頃からの注意喚起に努めています。

